

一九三〇年代の

プロテスタント・キリスト教界 (1)

土 肥 昭 夫

はじめに

一九三〇年代というのは、大正デモクラシーという幾分自由な時代から、日中・太平洋戦争期のきびしい統制の時代へと急激に変転していった激動の時代である。日本の経済は、第一次世界大戦後の慢性的不況から脱しきれなかったのみならず、金解禁政策によって、一九二九年の世界恐慌のおおりを直接うけ、危機的状况をむかえた。都市には失業者があふれ、農漁村は荒廢した。そのなかから、共産主義が興隆していったが、国家権力のきびしい弾圧と民衆的基盤をもたない思想の急進性のために、一部の指導者を獄中にのこして、大半の人たちは転向していった。それにともない、西歐化、近代化の終末が語られ、日本への回帰を唱えるローマン派の文学活動があらわれた。また、右翼思想による国家改造が叫ばれ、右翼や青年将校による政財界の指導者に対するテロ活動が続発し、人びとを恐怖と不安のなかに陥し入れた。

滿州事変以後、急速に台頭してきた軍部は、これらの情勢をたくみに利用し、天皇制官僚や巨大資本もこの軍部と結びつき、ここに天皇制国家による、上よりのファシズム体制が出現した。彼らは国内に非常時、挙国一致、国体明徴を唱えて、思想・風俗の取締りを強化し、軍備増強に狂奔し、国際的には国際連盟の脱退、中国大陸への侵略を推進し、ついに中国との戦争をひきおこした。この戦争は、アジアにおける欧米列強との帝国主義的抗争をひきおこし、その結果、日本はドイツ・イタリアと軍事同盟を結び、アメリカ・イギリス・オランダなどとの全面的戦争、つまり太平洋戦争をおこした。日本は文字どおりあらゆる勢力を戦時目的のために総動員して、この戦争にいどむことを促された。

このような全般的状況のなかで、民衆はどういう位置を占め、どういう役割を担ったのだろうかということが、われわれの研究會の中で話題となった。彼らの大多数はこのような状況の本質を見抜くことは困難であったし、日本帝國主義の歩みに対して抵抗とか挫折という意識をもたなかった。ある者たちは、日々の生活をあくせくと働き、戦争がおれば、徴兵、さらには徴用をのがれようとし、それもできないとなると、あきらめ顔で戦争に行く。少くとも日中戦争の初期までは、エロ・グロ・ナンセンスの風潮、軽快なリズムや哀愁にみちた艶歌調の流行歌がはやり、彼らはそれによってたのしんだり、うさばらしの生活を送っていたのではないか、と思われるのである。しかし、そのことのために、民衆を国家権力によるファシズムの枠外においたり、あるいはその被害者としてわり切ってしまうことはできない。日本のファシズムの被害者は、朝鮮や中国の民衆である。日本の民衆は、彼らからみれば、日本のファシズム体制を支え、それに加担して自分たちを生存の危機に陥し入れた加害者である。日本の民衆は、受動的であり、能動的であり、日本のファシズムを是認し、これを形成する役割を担ったのである。大体民衆を動員し得ないフ

アシズム、民衆が参加し得ないファシズムというものはあり得ないのである。それでは、さきにみたような生き方をしていた民衆がどうして、またどのようにファシズムと結びつくようになったのか、が問われるだろう。

この事をキリスト教界の問題としてさぐるうとするのが、この小論の課題である。ここでキリスト教界というのは、キリスト教を標榜し、それによって言動する集団の総称である。当時キリスト教界を支えた人たちの社会的階層は、中小商工業者、会社員、官公吏、学校教員、自営農、医療関係者といった中間層である。その指導者になった人たちは、高度な教育をうけた知識人である。したがって、彼らは社会構造の上では二大階級のいずれにも属さず、中間的位置を占め、歴史の変動に依りて、さまざまな動揺、変容、そして分化をくりかえし、その政治的、社会的立場は、あるときは急進的に、あるときは保守的になり得ることになっている。一九三〇年代のキリスト教界のいき方をみていても、この事はある程度まで妥当するだろう。しかし、ファシズムの進行過程においては、少数の例外者はあるにせよ、彼らは次第にその支配体制のなかに埋没したのみならず、それを補完する役割を担って、民衆の間に行動するようになった。このような彼らの歩みに、彼らの標榜したキリスト教はどのようにかかわるのだろうか。キリスト教が彼らの歩みに歯止めをかけるのではなく、むしろそれを促進する働きをするようになったのは、なぜだろうか。こういった問題も、この小論で検討してみたく思っている。

一 リバイバル運動

一九三〇年代の初期にみられるキリスト教界の動向はさまざまであった。まず、純福音を唱えていると自称したホ

ーリネス、ナザレン、自由メソジストらのリバイバル運動より始めよう。彼らが純福音という強烈なキリスト教的意識をうち出していること、またこれらの教派に属する人たちの多くが中小商工業者、店員、奉公人、工場労働者であることを考えるとき、彼らの運動を通じて、ファシズム的状况を迎えたキリスト教的民衆のいき方の一端をうかがうことができるだろう。

このグループのうち、代表的なものはホーリネス教会である。この教派は、メソジスト教会の元牧師で、アメリカのムーデー聖書学院で純福音を学んだ中田重治とその友人C・E・カウマンによって始められた伝道活動が拡大し、一九〇五年に東洋宣教会が結成され、一七年にホーリネス教会として組織されたものである。最初中田らは伝道活動に専念していたが、入信者が他教派に行っても、相容れないところが多かったので、彼らの教派をつくることになった。この教派は、聖書をすべて神の言としてうけ入れ、彼らが四重の福音というもの、つまり新生、聖化、神癒、再臨を強調し、その意味では、神学的にも教理的にも根本主義的立場に立ち、強固な教派的結束を誇っていた。

しかし、それだけではなく、この教派はメソジストの監督制をとり、その教会政治は実質的に強烈な個性をもった中田監督の政治的統率力によって動いていた。だから、この教派の信仰上の一致ということも、実は中田の見解への一致を意味していた。ある意味では、この教派は彼の家父長的權威によって支配された家族的共同体といえるだろう。民衆的基盤をもたず、むしろその社会から疎外されていたキリスト教界のなかにあって、この教派が民衆をひきつけたのは、ひとつはその単純明瞭なキリスト教のメッセージによってであるが、もうひとつはこのような民衆的な共同体意識にも負うところがあつたのではないか、と思われる。

この教派が三〇年代に入っておこしたものは、リバイバル運動であつた。この運動は、三〇年五月ホーリネスの神

学校である東京の聖書学院よりおこったが、たちまちホーリネスに波及し、さらにナザレン、自由メソジスト、日本伝道隊、アライアンスなど、いわゆる純福音を唱え、聖潔を強調する人たちが合流し、ほぼ一年半全国各地にわたる、熱狂的な情景を生み出した。彼らは、キリスト教における罪の救いとか潔めということを直接的かつ具体的な体験としてうけとり、これを訴えた。また、キリストの再臨ということも、思弁的に構成された神学的思考として論述するのではなく、この世界の出来事と直結した現実的な生起として確信し、期待した。彼らの集会は、熱烈な歌と踊り、説教、祈り、そして証詞でみたまされ、その参加者は歓喜のなかに、泣き、かつ叫んだ。少し長くなるが、ホーリネスの指導者の一人、米田豊が、この情景を見事に描き出すのみならず、その特質を明らかにしているので、引用してみよう。

「夜の祈祷会は此度のリバイバルの力と輝きが遺憾なく表われて最高潮に達した。……一宮兄がラッパを吹きながら勇壮な新選聖歌で集会を指導する。賛美や祈祷はマルで火のつくよう。実にリバイバルの火で焔づけられたる賛美祈祷であった。兄弟の中に又姉妹の中にさえ立って祈る者、或は拳を固めて空を打ちながら祈る兄弟もあれば、両手を握りしめて動かし身を震わせながら祈って居る姉妹もある。司会者が今度のリバイバルで恵まれた証詞をというと、学院（聖書学院―筆者）の兄弟姉妹等が一度に彼方でも此方でも立って寸鉄的な証詞をドシ／＼する。……期せずして証詞の一斉射撃という有様。理屈はい冷静な兄弟も燃えきって証詞をすれば、中には私は恵まれて嬉しくて／＼たまりませんと高く宙に跳ね上って証する者もあり、……一宮兄弟が……使徒行伝二章というや、其処です／＼、其を待っていました等の声が場内の各所より起る。殆んど一言々々アメンが叫ばれる。兄弟の勧話は短いが実に力がある。主の再臨は切迫して居る。此リバイバルは最後のものであるかも知れぬ。アナニヤ、サツピラ

の如く不正直であってはならぬ。我等は此際最後の決心、最後の奉仕を要すると言々句々人の心を扶るような強烈な勧がある。次いで祈った車田兄弟の祈祷が又何という力ある祈祷であつたらう。一言一言数百の全会衆を率いて神に肉迫するかのよう。アメン／＼の声、手を拍つ音が之と和して場内に蜂起したが、遂に場内に祈祷の嵐を引起し、……モハヤ誰一人見物人や傍聴者といつたような冷かな態度をとる者はあるまいと思わる程、火は全会衆を熔かして終つた。又ラッパが吹かれ、新選聖歌七番のいのれの歌が歌われる。……と学院の兄弟等例の如く二人手を取り合い立って踊り出す。或は四五人或は七八人、彼方でも此方でも。……人皆喜悅と賛美に無我夢中。……ホールは今しも天の舞臺殿でもあるかのよう皆は喜悅に昂奮して賛美しながら踊る」。〔米田豊「リバイバルの中は」『きよめの友』一九三〇・六・五〕。

こういう状景のなかで、語られる信徒の証詞もまたリバイバルの特質を明らかにする。たとえば、つぎのようなものである。『「今度覆えされました、』聖霊を受けました、』霊の呻吟を与えられました、』幼児の如くせられましたが、』心が喜びで一杯です、』昨晚九時半霊のバプテスマを受けました、』主の賜を与えられました、』私の心に靈火が焰々と燃えて居ます、』新しき使命を成遂げる力を受けました、』主の再臨が近い事を示され殉教の決心が出来ました』地への未練が取られて感謝です、(両手のない兄弟が)』信仰の両手を揚げてハレルヤと申します(と飛上る)。(盲の兄弟が)』霊の眼が開かれました、……』今晚確信を得ました、』主の再臨を今日か〜と待っています、』キリストの苦に与る者とせられました、』革命せられて感謝です、……』(米田豊「ホトリネス大会」同上紙、一九三二・五・一四)。

こういうリバイバルはなぜおこり、またどうしてひろまったのだろうか。当事者のことばを聞こう。「教会歴史を

見るとリバイバルが起った時は景氣のよい時よりも寧ろ不景氣の時に起ったようである。……人間が金が有る爲に享樂一方に傾く時には靈魂の救などは眼中におかぬけれども、此節柄のように不安におそわれて居る時は神を求むるようになるものである。」(中田重治「不景氣と復興」同上紙、一九三〇・七・一〇)。「今や日本國は不景氣風に吹きとばされんとして居ます。従つて思想悪化し、此分に進みまますならば如何なる國家的災害が勃發するか解りません。此度日本國にリバイバルが起りますならば、人々の靈魂は救われるばかりでなく、人心に希望と歎喜とが起り、社會は不景氣より救われ、國家は危機より脱する事が出来ます。……今は末の世です。主イエスの再臨が近まつて居ます」(『天國の道』一九三〇・九)。これらの証言は、三〇年代はじめの状況を見事に反映している。民衆は不景氣と沈滞、混乱と頹廢、不安と恐怖、焦燥と絶望のなかに、なんとなくうす氣味のわるい時代の到来を予感していた。リバイバル運動の指導者たちは、このような世相を「末世」としてとらえ、キリストの再臨によって、一切の苦しみや悩みが解決され、歎喜と希望が与えられるのだ、という。さきこのべたりバイバルの状況はこの事を如実に描き出している。民衆がこれにとびこんでいっても、決して不思議ではないのである。

リバイバルの原因はそれだけではなかつた。特にホーリネス教会の場合、一種の抑圧された状況のなかで孤立したたたかいを余儀なくされていた。「日本のホーリネス人は今右傾思想と左傾思想の間に挟まつて大に奮戦して居る。右傾の連中は何でもかんでも國家方能で押し通そうとして居る。神社などを担ぎ出す連中や日蓮主義などを説き廻る輩は其中に居る。左傾の連中は社会主義やマルクス主義を説く輩で破壊を目的として居る。其中には基督教社会主義などと唱え左傾思想と妥協したる鶴のようなものもあるが、……ホーリネス人は神社などに参拜せざる爲に或者からは左傾の者と見られ、國民として皇室中心主義を主張し又基督の再臨を信じて居るから、左傾の連中からは基督教の右

表(一) 純福音派の教勢 1929—1933

		1929	1930	1931	1932	1933
ホーリネス	(A)	9,812	12,046	11,330	19,523	19,357
	(B)	2,171	4,311	3,487	2,882	1,767
自由メソジスト	(A)	1,544	1,811	1,660	1,853	2,187
	(B)	328	380	251	303	297
ナザレン	(A)	814	1,180	1,100	1,384	1,299
	(B)		318	277	257	311

- (1) 『基督教年鑑』1931—1935年に毎年掲載されている統計表によってつくった。
 (2) (A)は会員数(B)は受洗者数である。

傾派と見られ、時代遅れの頑固連と見られて居る。」(中田重治「マルクス主義か基督の再臨か」『きよめの友』一九三二・一・八)。神社参拝問題についてはあとでのべよう。中田はマルクス主義を「絶対の善を認めて居ない」「物質慾を満足せしめんとする主義」であり、したがって「神の国と其義を求むる我等にとりてはマルクス主義は大敵である」といい、ホーリネス人は「多数の力をかりてその主張を貫徹せんとする」ようなストライキに参加しないから、迫害をうけている、とするのである(同上論文)。当時のホーリネス教会は、このように教界外よりの挑戦を意識していたのみならず、教界の主流からも「悪評」めいたものをうけ(中田重治「ホ教に対する悪評」同上紙、一九三〇・四・一〇)、また他教派のようにミッションとのつながりを持たない独立の教派であった。そこに蓄積されたエネルギーが宗教的パトスとなって燃え上る可能性を彼らは秘めていたのである。

このリバイバル運動によって、純福音派、特にホーリネスの教勢は著しく増大した。表(一)にみるとおりである。この受洗者の会社層を明らかにする手がかりがないので、断定的なことはいえない

いが、おそらく知識層に属さない、一般の民衆が多かったのではないか、と思われる。彼らはリバイバル集會に自己をなげかけることによって、日常的な思い煩いや苦しみの一切が解決されたと確信した。そこでは、近代的知性による啓蒙的活動を媒介とした、他教派の伝道にみられない衝撃と迫力を感得したにちがいない。

このリバイバル運動によって、純福音を唱える諸教派の連絡組織がうまれた。もともとリバイバル運動には、教派的なものとは無縁であるか、あるいはこれを縦断するような性格がある。したがってリバイバルを共有する者たちは、教派とかわりなく、相互に結束する可能性を持っていた。三〇年一〇月に聖書学院でひらかれた全国リバイバル大会が終ったとき、教役者会がひらかれた。そして「主は近し。日本全国の教化を速かにせんがために、同信の諸教団合同し、新団体を組織せんことを希望す。右進言す。」という有志の提案にもとづいて、再臨準備リバイバル同盟が結成された。これにはホーリネス、自由メソジスト、ナザレン、日本伝道隊、アライアンス、その他同系統の諸教派が加入した。その後の大規模なリバイバル集會は、この同盟によって、開かれた。彼らの結束は、やがて三三年一月の日本聖書信仰同盟の結成につながった。この組織は、「聖書を悉く神の言なりと信ずる聖潔派の諸団体及び単立教会をもって組織」された。そして日本基督教連盟とは別に、宗教上、社会上の問題で協力して活動することを旨とした。³⁾

このリバイバル運動は、一年数カ月を経て、三二年一〇月の全国リバイバル大会を過ぎる頃から、熱狂的な状景に閃する限り、終りを告げている。三二年の「反省」の名の下に「信仰界に於ける自然淘汰」(中田重治「反省の時」)同上紙、一九三二・一二・一〇)があたり、我等はキリストの再臨といってもこれが数年後に主が来給うとも異邦人の時が終るとも断言する者ではない(米田豊「再臨の時期と伝道」)同上紙、一九三二・一二・二四)とか、「白熱的の祈禱」

ではなく「任意自発的の、隠れたる所に於ける呻吟の祈祷こそは実に貴いものである」(同「密室とリバイバル」同上紙一九三二・一二・三二)といったことばがきかれるようになった。

最後に、このリバイバル運動の問題点をファシズムの状況との関連でのべておこう。リバイバル集会に参加した人たちが、これによって回心をおこしたとき、彼らは自分たちが生まれ、育ってきた文化的、社会的状況やそのなかにおける自分の価値観といったものからあまりにも隔絶された世界にひき入れられ、そこにおいて圧倒的にせまってくる宗教的情熱に身をゆだねることになった。この隔絶性のために、自分の苦しみや悩みが解消したのである。しかしながら、こういった方法でうまれた魂の救いは、自分の社会的状況や精神的伝統ときりむすばないままに、一挙に得られたものであるだけに、彼らは聖なるリバイバルの世界と俗なる日常生活の間にとって迷い、動揺することになるのである。これは必ずしも受洗者の問題だけではなく、実はホーリネス教会自身に内在する大きい矛盾であった。

この矛盾をはっきり示すものに、第三回総会(一九三二・一一)の決議がある。「我等基督信者は聖書の教うる敬神尊王の本義に基き皇室中心主義を守り、惟一、神信仰に反する一切の礼拝及び一切の不法行為を排す」(傍点筆者、同上紙一九三二・一一・一七)。この決議で、傍点部分は彼らの信仰から出た主張であり、それは具体的には、神社参拝拒否をさす。すでにホーリネス教会第十二回年会(一九三〇・四)は、神社を一つの宗教と認める決議をし、決死の思いで、神社参拝を拒否することを表明した。その後より満州の安東女学校における神社参拝拒否をはじめとして、各地に神社に参拝しないために中傷や妨害をうけるものがあらわれ、中田は『きよめの友』にこの事を報告しつつ、信教の自由運動の展開を訴えた。ところが、さきの決議のうち、傍点以外の部分は、当時の天皇制国家が、世相の不安と頽廃や共産主義の台頭に対して、思想善導の名の下に敬神崇祖の「美風」として国民の間に浸透させるために用い

たキャッチフレーズをもちこんでいる。政府が神社非宗教をとなえて神社参拝を国民に強要したのも、実はこのような思想善導政策の一環であった。そうすると、ホーリネス教会の決議は、一方においてこのような天皇制國家の自己宣伝政策に加担しつつ、他方においてその象徴たる神社参拝だけを拒否するという矛盾を露呈している。

こういう矛盾がどうしておこってきたか、といえば、まず信仰と歴史に関する彼らの神学的見解に問題があるからである。彼らは個別的な問題を歴史の全体的な状況のなかで位置づけ、これを信仰者としての視点から洞察することができなかった。彼らは自分の信仰の一貫性を求めるあまり、歴史に内在する問題を信仰の中に解消してしまつた。その結果、ひとりよがりな歴史解釈を施してしまい、かえって歴史の潮流に足をすくわれることになつた。そのあらわれが、中田の『聖書より見たる日本』(一九三二)以後にみられる日本主義、皇道主義の思想と実践活動であり、これがホーリネス教会分裂の原因となつた。

もうひとつの原因は、キリスト教的民衆の問題である。このリバイバル運動をとりあげられたナザレンの神学者喜田川氏によれば、当時のホーリネスやナザレンは民衆のキリスト教をかたり、民衆の中に深く身を置いていたので、彼らに深い影響を与えたが、同時に民衆感情に押流され勝ちであつた。この事は当時の世相がリバイバル運動をおこす原因になつたり、再臨到来という危機感が民衆一般の危機観に迎合してなされたり、この運動が下火になつてくると、ナザレンの場合「余りに民衆感情にとけこんだため、民衆の持つ素朴な国体観、また軍國的気分ほとんど抵抗することが出来なかつたのである」とされた。さきのホーリネス教会の問題点からいえば、むしろこのリバイバル運動そのものが民衆に歴史を醒めた眼で見ることを止めさせたともいえるだろう。いずれにせよ、リバイバル運動にあらわれたキリスト教がファシズムの民衆への浸透に歯止めをかけることはできなかったことは、たしかである。

二 神の国運動

日本基督教連盟を母胎としておこった神の国運動は、さきのリバイバル運動と趣を異にした、キリスト教界のもう一つの伝道活動であった。一九二九年四月に国際宣教連盟 (The International Missionary Council—IMC) 会長 J・R・モットを迎えた連盟の特別協議会で、賀川豊彦が神の国運動を提案し、これが会の賛同を得た。しかし連盟が直接的に伝道活動を主催するのは好ましくないというので、賀川グループと相談し、両方よりえらばれた人たちで中央委員会 (委員長富田満) を組織し、これが運動の主権となることを第七回連盟総会 (一九二九・一一) は承認した。そして宣教七十年記念式典とともにおこなわれた神の国運動宣言大会 (一九二九・一一・六) で、この運動開始が宣言され、つづく全国協議会でその伝道方針がきまり、翌年より三二年一月まで約三年間、この運動が展開された。全国各地には地方委員会が組織され、中央委員会と連絡をとりつつ、諸教派の協力、提携の下におこなわれたこの運動は、日本キリスト教史上稀にみる大規模の教派協調的で組織的な活動であった。中央委員の編集した週刊『神の国新聞』は、その運動の機関誌として刊行された。

この運動を提案したのみならず、この運動の主要な講演者として活動したのは、賀川であった。したがって、この運動の特質をみようとするならば、賀川の立場を知らねばならない。一九一〇年代後半より二〇年代前半において、彼は労働運動、ついで農民運動の指導者として組合活動の主導権を握ってきた。しかし、そのいずれの場合も、彼の

ギルド・ソシアリズム的な理論と実践は、独占資本の確立期において、階級分化が進行している状況では妥当しないと唱えるサンジカリズム、ついで共産主義のグループから排斥され、彼自身もその運動に失望した。しかし、労働者や農民の人格の自由と尊厳を主張し、彼らの解放のために挺身することは、彼のキリスト教の根本的命題であった。キリストの贖罪愛に生きるものの負目であった。彼は協同組合運動に自己の社会運動の最終的な到達点を見出した。彼は階級闘争によらないで、人間と人間との人格的交わりを根幹とし、相互の協同扶助によって、組合員の生活改善と安定を目ざす運動を展開した。その場合、どうしても、キリスト教的な人間観、価値観の確立、つまりキリストの贖罪愛に生きる人間性の確立が不可欠な前提となった。この事は、彼が労働運動や農民運動にたずさわっていたときにも、身にしみて感じていたことであった。キリスト教による人間の救いと人間性の内的革新をせまる宗教運動が、労働者や農民の解放を目ざす社会運動の根幹になければならない、と彼は確信した。したがって、彼の宗教運動は実質は従来の社会運動の再編であった。その意味では、彼の唱えた神の国運動は狭義のキリスト教伝道ではなく、宗教的、社会的運動であった。

二二年に賀川はイエスの友会を結成したが、彼はすでにこの時点で、このような運動にたずさわる同志をキリスト教界に求めていた。さらに、二五年一二月の連盟の協議会で百万人救済運動私案を提案した。彼は、日本のプロテスタント信徒は一六万にすぎず、少くとも百万人なければ、社会的勢力となり得ない、そのために教派の枠をこえて大挙して伝道しなければならぬとし、その具体策として、労働者や農漁民への伝道案を提示した。しかし、彼の私案は実行に移されず、イエスの友会が、これを神の国運動と名付けて行なった。二八年六月の連盟全国協議会は、この年の春のIMCのエルサレム大会でとえられた思想的社会的分野における伝道の問題を考え、一カ年にわたる全国

協同伝道を決議し、教会の内的充実とともに思想問題にとりくむことを決めた。賀川はこの協同伝道に全面的に協力し、全国各地におどろくべき数の聴衆をあつめ、多数の求道ないし受洗決心者を得た。連盟が賀川の神の国運動の提案をうけ入れたのは、ひとつにはこの成果のためであった、と思われる。

さて、賀川に始まる神の国運動が、連盟を母胎とした組織活動になったとき、賀川の意図とこの動運は微妙なちがいをみせるようになった。「神の国運動宣言書」(『神の国新聞』一九三〇・一・一四)や『神の国運動指針』(一九二九・一)からこの事をみよう。

まず、賀川は伝道者として全国をめぐる歩き、農漁村、都市、家庭に絶望的な状況にある人たちの救いのために、救霊活動を展開し、彼らが自分の働き場所において、また地域社会において贖罪愛に生きる実践活動にたずさわるところを期待した。これは神の国運動宣言大会における彼の講演「日本教化の理想」(同上紙、一九三〇・一・七)よりも明らかである。ところが宣言書や指針をみると、教会を伝道の「根城」として、「教会中心主義の活動」をとり、教会の「充実発展」を遂げることがこの運動の主眼となっている。たしかに賀川も教会を拠点として伝道することは考えていたが、彼の運動目的が教会の充実発展にあつたかどうかは、疑問である。その結果、賀川らの運動と教会関係者の間には、ずれがあつたのではないかと思われる。これは広くいえば、連盟の運動と教派の伝道のずれにもつながらる。

もうひとつは、宣言書の終りに日本国民に訴えている部分の問題である。「我等生を此国土に稟け、祖先以来多くの祝福の裡に、光榮ある歴史を保有し光輝ある伝統を嗣ぎ以て人類生活の上に、何等かの貢献を為し得べき素地を与えられ、使命を自覚せしめらるるは、之れ如何ばかり大なる神の恩恵であろうか。……而るに近時動もすれば国民精

神の動搖甚しく、わが同胞の社会生活の間に於て、屢々苦々しき事実の曝露せらるるものもあるを見る、実に淺狹しき限りといわねばならぬ。之れ畢竟我等国民の享有せる尊き伝統を培い之を新時代の生活様式に適應せしむべき理想と信念とを缺如せるが為に外ならぬ。」(傍点筆者)

これとほぼ同じ頃しるされた賀川の次の詩的文章を引用しよう。「日の出づる国よ、神を仰げ、なぜ、おまえは、疑獄事件に、失業に、親子心中に、説教強盜に、放蕩に、酔酒に悩む必要があるのだ!……日本は神に従う可き理由がある。神なくして、日本は存在すべき理由はないのだ。その山も、その河も、大能なる神が造り給うた……神は日本を美しく造り、日本民族を二千数百年恩み給うた。そしてこの国を外敵より守りこの国に慈愛の手を加え、ここに人倫の道を教え、今日まで、多くの予言者をおき、キリストへの探求を一步一步高めさせ給うた。それに、恩に慣れた国民は、神を忘れ創造主を蔑み、そこに遊廓と監獄を増築し、酔酒と放蕩に、投機と殺人に都市と田園を沙漠に換えつつある」(「日本を神に捧ぐ」同上紙、一九三〇・一・二二)。

両者ともにナショナリズムと愛国的心情にあふれた文章であるが、問題はその内容である。宣言書の場合は、日本の歴史的伝統としての国民精神をキリスト教的に是認し、その自覚と昂揚をうたっている。しかも、その国民精神なるものは、近代日本の天皇制国家が培養してきた淳風美俗や臣民道德を暗示している。これに対して、賀川の場合には、もっと根源的で普遍的な自然観、文明観を宗教的立場から確立し、美しい日本とその歩みを見失ってしまった近代日本の文明への批判を打ち出している。その意味では、両者は著しく相違した主張といえるだろう。この相違は、神の国運動が第二期の活動を三三―三四年におこなうようになったときに、表面化した。つまりこの運動は、この時期における精神作興運動と提携し、やがて後者が連盟の主要な活動になっていくが、その頃には賀川は、そのいずれ

表(二) 主要教派の教勢 1929—1933

	1929	1930	1931	1932	1933
日本基督教会 (A)	43,747	45,324	47,044	48,246	49,717
	(B) 3,127	2,828	2,971	3,044	2,967
日本組合教会 (A)	29,116	31,167	31,570	31,401	31,484
	(B) 1,596	1,982	1,515	1,171	1,185
日本メソジスト教会 (A)	33,819	35,902	37,451	30,979	33,180
	(B) 2,385	2,934	2,447	2,540	2,169
日本聖公会 (A)	24,017	27,348	26,809	26,165	26,618
	(B) 1,332	1,994	1,884	1,867	1,704

- (1) 『基督教年鑑』1931—1935年に毎年掲載されている統計表によってつくった。
 (2) (A)は会員数, (B)は受洗者数である。

からも身を引いていた。

神の国運動は三年間をもってひとまず終わったが、その完了報告によると、全国に九三の地方委員会が組織され、九四一の各派諸教会が協力し、一、九五四名の講師により、四、一〇二回の集会を催し、聴衆は八六万人余であった。さらにより大切な成果として、各派教会の牧師、信徒の協力精神が培われたこと、社会の精神的不安や反宗教的勢力に対してキリスト教の立場を明白にしたこと、世界の諸教会の伝道方法に貢献したこと、⁵⁾農漁村や工場地帯に伝道の門戸を開いたこと、教会中心主義の伝道をしたことがあげられている(『連盟時報』一九三三・七・一五)。

しかし、これらの数字や成果については、多少の説明が必要である。まず、おどろくべき集会数、聴衆者数、そして四万五千人といわれる求道ないし受洗決心者数のことである。⁶⁾表(二)に主要教派の受洗者数をあげておいたので、それと比較すると、神の国運動による伝道が、教会の受洗者数に影響を多少与えたことは認められるが、それほどめざ

ましいとはいえない。『神の国新聞』をよんでいると、賀川が集会をひらくと、千人から二千人の聴衆があつまり、その一割前後の人たちが決心者となっている。その人たちの大多数は、その後教会を訪れ、その集会にも出席したが、受洗しなかったことになる。そこに賀川のつたえるメッセージと教会のそれとの間にずれがあったのではないか⁽⁷⁾。また賀川の集会で味わった民衆的雰囲気と教会に感じられる知識人的中間層のそれとの相違性も、彼らが教会に定着しなかった一因ではないか、と思われる。いずれにせよ、神の国運動と教会教勢を直結することは困難であるといえよう。

もう一つの問題は、農漁村や労働者への伝道である。賀川や彼と行動を共にした人たちは、彼らにむかって、働く人間としての普遍的価値の自覚、その自由の確立、キリストの贖罪愛にもとづく協同精神の必要性を訴えた。それゆえに、彼らは共産主義が人間の価値を物質的基盤におき、階級的自覚にもとづく闘争を唱えて、人間性を破壊するものとして攻撃した。彼らがめざしたものは、キリスト教的兄弟愛に根ざす協同社会の建設であり、実践的には協同組合運動を提唱した。

このような見解と提案は、教育的活動を媒介としなければならなかった。神の国運動を通じて、盛んに開かれたのは、農民福音学校である。これは賀川とともに農民組合運動にたざさわった杉山元治郎、群馬県渋川で農村伝道に従事してきた組合教会牧師栗原陽太郎らが、既に実験的におこなってきたものである。彼らは、デンマークが一九世紀半ばにプロイセンとの戦争に敗れ、最良の土地を失い、国土は荒廃したが、グルントウィヒが国民高等学校をおこなってキリスト教精神にもとづく教育を通じて、農業国家の再建の基礎をつくったことを学び、この教育的方法を日本でもおこなっていた。特に栗原は三一年に連盟の囑託幹事になってから、この学校の開設と指導に努力した。この年に

農民福音学校指導者養成協議会が二度にわたってひらかれた。記録によれば、三一年六月より翌年六月までにひらかれた農民福音学校は、全国にわたり、五二校におよんでいる（『神の国新聞』一九三二・七・一三）。この学校というのは、その地域の農村青年たちの参加を得て、農閑期の二―三カ月にわたり、私塾的な教育方法で、キリスト教の人間教育、農村社会や経済に関する知識の教授、新しい農業技術の指導をおこなうものであった。

ところでこのような農村にむけた神の国運動は当時の農村社会にどういう意味を持っていたであろうか。当時農業恐慌が深刻化し、小作争議が激化し、地主組織の農村救済請願運動が展開されていたが、これに対応して、農林省の新官僚が中心となって、経済更生運動を推進していた。これは産業組合を中心として、これに信用、購買、販売、利用の四事業を行わせることによって地主、中農層のみならず、貧農層をも吸収していった。そして農村の自力更生、協同社会の実現の名の下に、生産、消費の合理化をおこない、それによって農村共同体の統合規制をはかろうとするものであった。この運動は必ずしも経済的実効をもたらしたとはいえないが、小作争議を解消し、下からの農民組合運動をつきくずし、ファシズムが農村社会に浸透することを容易にする社会的基盤を確立していった。神の国運動にみる農村の精神的救済をめざす社会運動が、農村の自力更生を精神的にも強調した産業組合運動とどのように関連したかは、甚だ興味ある問題である。これを説明する有力な決め手はまだ見あたらないが、次の二つの事だけは指摘しておかねばならない。

ひとつは、産業組合運動の「裏の機関誌」ともいわれ、組合員農家に有料で配布（販売ではない）されていた『家光』に、賀川の長編小説「乳と蜜の流るる郷」が一九三四年一月より三五年一二月にわたり連載されたことである。これは福島県の貧農の次男の自力更生物語で、三〇年代前半に農民なら誰でも多少経験する諸問題をとりあげ、

そのなかで奮闘する主人公を通じて、自力更生運動の三大目標である、多角経営による生産の拡大、産業組合運動、勤労の倫理を強調している。小説の結末は、主人公が産業組合全国大会で健康保険組合設立の決議をとりつけることになっており、賀川の協同組合論がそこに反映している。賀川には彼なりの論理と文脈があったにちがいないが、彼のことばがひとりあるきをし、産業組合運動の補完的イデオロギーの役割を担う可能性はあったのである。

もうひとつのことをのべよう。『神の国新聞』は三〇—三一年に「何が彼等を叫ばしたか」とか「彼等は叫ぶ」というコラムを設けて、多数の農民、労働者、家庭婦人の声を掲載している。もとより編集者の取捨選択があるので、限界はあるが、神の国運動に対する彼らのなまの反響をみるができるだろう。それをよんでいくと、自分の生活の退廃や貧困の苦しみの中から、この運動によってキリスト教に接触し、救いの喜びを得たとのべる者、伝道の熱意に燃えて家族や友人に働きかける者、この運動に共鳴して献金を乏しい収入からおこなう者、小さい善意をもって人びとに施し物をする者など、さまざまである。しかし、次のような共通面がある。彼らはキリスト教に入ったとき、自分の周辺に同信の友を殆んど見出し得ず、家族や同僚たちから変り者として批難や中傷をうけ、ある時は棄教の強迫をせまられている。こういう農村社会においては、信仰を保持することがやっとなであり、さらにこの孤立した状態のりこえるためにはキリスト教の伝道ということを一義的な仕事にしてしまう。もっとも、農村の窮状を訴え、これにキリスト教信徒としてたち向う決意を表明しているものもあるが(同上紙、一九三〇・一〇・一五)これは稀である。つまり、キリスト教をもち出し、農村伝道の一環として、農民福音学校などによって農村社会に浸透していこうとしても、その出発点において、キリスト教は「よそ者」のことばとして農村社会から浮き上っていたのである。農村社会におかれたキリスト教信徒の叫び声をこのように解釈するならば、神の国運動は農村社会ではキリスト教の自己弁

明という活動をのこしたにとどまり、賀川が理想とした協同社会の建設などは、その手がかりさえ得ることが困難であった、ということになる。換言すれば、神の国運動は産業組合を中心とした農村更生運動に衝撃を与えることは出来なかったといえるだろう。

神の国運動は三二年一月をもつて一応終わったが、この月の神の国運動協議会は、三年間の成果に鑑み「非常時日本」の救済という勇ましいかけ声の下に、これを第二期の運動としてさらに三三―三四年と二年間継続することになり、翌日の全国基督教協議会、つづく第一〇回連盟総会もこの事を承認した。しかしながら、第二期の運動は大眾伝道をあまりおこなわず、農民福音学校、工場伝道協議会、各地の修養会の開催、およびこの協議会と総会で可決された精神作興運動と提携して主としてキリスト教主義学校におけるキリスト教講演会の開催を主要な活動とした。『神の国新聞』は連盟の援助のもとにキリスト教の伝道新聞として刊行がつけられた。しかし、第一期にみられるような運動への盛り上りや成果はもはや生まれなかった。ファシズム的統制の進行も教界の自由な運動をさまたげる原因となったのである。

三 日本基督教連盟の諸活動

三〇年代の連盟の諸活動に入る前に、連盟の性格を明らかにしておきたい。日本基督教連盟というのは、一九一〇年のエンバラにおける世界宣教会議 (the World Missionary Conference) の後をうけた日本継続委員が、日本のミッション同盟 (一九〇二年結成) と日本基督教会同盟 (一九一二年結成) と連絡をとり、二二年五月の全国基督教協

議会でその設立を決議し、二三年一月の創立総会で結成されたものである。したがって、それは、世界の伝道地における諸教派、諸団体の協力提携を促進しようとする National Christian Council (NCC) 運動の一環であり、国際宣教連盟 (IMC—一九二一年結成) その他の海外のエキュメニカル団体と密接な交渉を持つ組織である。その上、連盟はミッション同盟の加盟を得ていたので、国際色のつよい団体であった。このために、連盟は国内の諸事情によって左右されないで物事を処理することができるように思われるが、また同時に、たえず海外の諸組織の援助や協力を期待して事業をすすめようとする傾向をもち、その結果他者依存的体質がうまれ、これが連盟の諸活動を著しく方向づけることになりかねなかったのである。

連盟は、さきに述べた純福音派をのぞく大多数のプロテスタント諸教派 (日本聖公会は二九年より加盟した)、婦人矯風会、YM、YW、教育同盟会などのキリスト教諸団体、および諸教派に関連したミッションの組織であるミッション同盟を加盟団体としていた。そのために、キリスト教界外よりは、連盟が日本のプロテスタント教界を代表する組織のように考えられ、国家の宗教政策や他宗教との交渉では、連盟がその窓口となるのみならず、教界の代表機関として行動することも少なくなかった。また逆に、上よりのファシズム体制が強固になり、キリスト教にも圧力と動員が及んできたとき、連盟はその代弁機関となって、キリスト教界を動かすことになりかねなかった。さらに、連盟はもと諸団体の自発的な加盟によって立つ連盟組織であったから、諸団体相互の援助と協力によって活動し得た。もし加盟団体の主張や利害が対立したときには、連盟は消極的に調停、調整の役割しか果たし得なかった。たとえば、二七年の宗教法案に対して連盟は諸教派の支持が一応得られたので強力で反対運動をすすめることが、出来たが、二九年の宗教団体系案では、運動に消極的なメソジスト教会と積極的な日本基督教会でそれぞれ連盟脱退問題がおこった

ため、連盟自身として反対運動から身を引くという処置しか出来なかった。

この連盟は、憲法によれば、国内外のキリスト教諸団体の協力活動をはかり、国内の諸問題でキリスト教に関連するものに対して、キリスト教界の与論を表明し、加盟団体の共通の問題に関して協議し、共同の活動をおこなうことを、その目的および機能としている。三〇年代になって、連盟はこのような機能を行使する機会が多くなった。

三〇年代のはじめの連盟の活動は神の国運動を強力に後援していくことであつた。そこで、前述の神の国運動でのべなかつたことで、連盟の性格をあらわすものを簡単にあげておこう。

一つは農村伝道である。IMCのエルサレム大会の決議にもとづいて、アジア、アフリカの諸教会を訪問し、農村伝道について示唆を興えていたアメリカの農村社会学者K・バターフィールドが、三一年四月に来日し、各地を調査、訪問した。彼を迎えて第一回農村伝道協議会が同年七月に御殿場で開かれた。(「第一回農村伝道協議会」『連盟時報』一九三二・八・一五)。この協議会は、日本の教会が農村伝道に総合的にとりくんだ最初の会であり、諸教派の協定によつて農村教区を設置すること、農村社会の調査機関を設立すること、単純で平易な伝道メッセージを作成すること、農村社会に奉仕する社会事業機関を設立すること、農村伝道者養成のために神学校の協力を求めることと農民福音学校を拡大すること、諸教派諸ミッション協同の下に中央練習所をつくり、農民信徒を訓練すること、農村教会の自給は伝道上不可欠であることなどを協議し、申し合わせた。このうち、農村教区(Community Parish)というのはバターフィールドの独自の主張である。つまり、農村社会の地形、行政、産業の構造を考慮して、一つのコミュニティーを設定し、そこに諸教派が協定して一つの教会を設立する。そして、その教会はその地域の伝道、宗教教育、民衆教育にたずさわり、衛生保健、産業奨励、運動、娯楽、家庭、婦人といった問題にとりくみ、地域の農民生活を充実さ

せようとするものであった。それは諸教派の自由な伝道活動を調整し、集中させて一地域一教会という方式をとり、また教会と農村活動センターを一つにして地域の伝道と奉仕を推進していく方法であった。なお、これらの申し合わせの殆んどが、バターフィールドの勧告にもとづいたものであることは、協議会における彼の提案「日本農村に於ける基督教事業」 同上紙、一九三一・七・一五、その他の彼の日本における講演記録をみれば、明らかである。

この協議会は連盟に対して農村伝道部の新設、その専任幹事の設置、農村伝道実験所の設置を特に推奨することを決議した。連盟はこれにもとづいて、連盟内に農村伝道委員を設置し、囑託幹事として栗原陽太郎を依頼した。そして農村伝道委員は三五年頃より農村文化研究所の設立を考え、アメリカの教会の援助を求めたが得られず、結局賀川の好意と乏しい自己資金で、賀川の経営する武蔵野福音学校の隣接地に設備を整え、農村伝道者養成をめざして三八年四月より開校することになった。しかし主任藤崎盛一が応召のため不在になり、その実施は延期された。

工場伝道については、工場伝道協議会が三二年五月に東京で、翌年五月には大阪で、神の国運動社会部との共催で開かれた。これには中小企業の経営者と教職者が参加した。特に東京の会合は内務省や警視庁の官吏による講演があり、工場経営者の労働対策的格がよかった。いずれにせよ、労働者の参加を得ないで、労働者のためのキリスト教活動を考える程度の会合であった。

連盟はキリスト教主義学校教育の問題にもとりくんだ。J・R・モットを迎えて開かれた鎌倉および奈良の特別協議会（一九二九・四）は、この問題の重要性を強調し、いくつかの提案をとりきめた。また二九年七月アメリカのウィリアムスタウンで開かれたIMCの常議員会は、日本代表の提案をうけ、日本のキリスト教主義学校の現状と将来の指針に関する研究調査のために調査委員の推挙と派遣を決めた。三一年九月にその委員一二名がきまったが、そのう

ち四名はアメリカのキリスト教教育家で、残りは日本のキリスト教主義学校に関係した人たちであった。このほかに連盟と教育同盟より実務委員があげられ、アンケート調査をするなどして、準備をすすめた。アメリカ側の調査委員は一〇月に来日し、実務委員らと協議をかさね、全国のキリスト教主義学校の殆んどを訪問し、調査委員全員の承認を得た報告書を作成した。“Christian Education in Japan: Report of the Commission on Christian Education in Japan” New York 1932 がそれである。それによると、日本では政府による教育制度が充実しているから、キリスト教はそれを補充するために学校を増設する必要はない。しかし、キリスト教主義学校は、教会の伝道機関、キリスト教の理想や主義を社会にひろく扶植する機関、日本の国民道徳に貢献する人物を輩出する機関、キリスト教によって立つ有能な指導者を養成する機関として存在理由を持つ。このような意義づけに即応して、報告書は、中等学校、専門学校、女子教育、神学校、大学に関して具体的な提案を推奨している。このうち、たとえば神学校に関しては、関東と関西にそれぞれ一つの合同神学校を設置し、これらを同程度のものとして、学生が自由に科目を履修することができるといった提案がある。また大学については、現存の大学と男女の専門学校を構成単位とする連合キリスト教主義大学を設立し、大学評議員会が各学校と大学の発達のために公平な管理運営にあたるといった提案をしている。神学校については、日本にあまりにも多すぎるので、関係者の間に話題になっていた。また大学については、世界宣教会議の日本継続委員の間で一四年頃、合同大学の構想が立てられた。しかしいづれも実現しなかった。今度の場合も、やはりそれらを具体化することは困難であった。何よりもまず、そういう努力がどれだけ関係者の間でなされたかもしっかりしない。わずかにキリスト教教育国際委員会というのが、三六年に総合大学あるいは大学院のような学術研究所設立を考え、アメリカ側の委員と交渉する準備をしていることが報告されている〔基督教年鑑〕一九三七

年、二六ページ)。四〇年代前半の戦時統制の確立期にならないと、神学校合同が具体化できず、また敗戦後の混乱期でなければ、合同キリスト教大学問題が再燃しなかったことは、何とも皮肉な話である。いずれにせよ、連盟や基督教教育同盟会は自主的にさきの推奨案を具体化する実行力を持っていなかった。大体この調査委員会の提案にしても、さきの農村伝道協議会における農村教区の構想にしても、連盟は外国の指導者から示唆を得て立派な理想案を打ち出す、それだけで終ってしまったのである。

連盟が伝道とかキリスト教主義学校の教育問題をキリスト教会内外の指導者をあつめて協議し、決定しているかぎりでは、問題は少なかった。しかし、国内外の諸問題で、キリスト教界を代表して活動するようになると、三〇年代のファッションにかかわらざるを得なくなった。

三一年九月に満州事変が起ったとき、連盟は中国関係の基督教連盟より、これを日本の侵略として非難する電報をうけとったが、これに対して「満州事変を深く痛む。平和的解決を祈る」と返電した(『連盟時報』一九三一・一〇・一五)。一九二〇年代より満蒙を日本の生命線とする前提の下に、政府の政策が推進されていた。この視点に立つならば、満州事変に見る軍部の暴走も、日本の国家の生存上追認されることになる。連盟も日本の生存の危機と関連させてこの事変をうけとめているために、日本帝国主義の前に自己の生存の危機に直面した中国の人たちの批判がみえなかった、と思われる。この時点で連盟は、国家の危機とか非常時を口実にして中国侵害へと民衆を動員していかうとする支配勢力の側に立って物事を考えてしまっていたのである。

三二年一月の上海事変になると、連盟は欧米列強が軍隊を上海に集結させてきたことを憂慮し、IMCを通じて、関係各国が武力使用を放棄して、平和的に紛争を解決するように、世界の諸教会に訴えた(同上紙、一九三二・三・一

五。この訴えは抗議としてまず日本の政府にされるべきであったが、その側に立ってしまった連盟には、それが出来なかつた。のみならず、この訴えは日本の中国侵略を援護する役割を演じている。

この年の三月の満州国建国によって、日本は国際的に非難をうけ、孤立化へと追いこめられることになるが、連盟常議員会は四月に「時局に関する進言」(同上紙、一九三二・四・一五)を政府に提出した。それによると、連盟はこの建国を「和平解決の曙光」とし、国際的不信任を「疑惑」として、これを一掃するように当局に要望し、国際連盟の規約や国際的条約の尊重とそれにもついた日中間の紛争解決を訴えた。これは、日本の満州植民地化を是認した上で、それに不満な欧米列強との平和的關係の持続を願うもので、満州事変のときと同様に、アジアの隣邦との友好平和を視点としない進言である。

国際連盟は、リットン調査報告にもとづいて、三三年二月に日本軍の満州撤退勸告案を可決し、日本は国連を脱退した。国内では非常時が叫ばれ、五・一五事件、政党内閣の崩壊が生じ、挙国一致、自力更生の名においてファシズムが急速に興隆していった。三三年一月の第一一回連盟総会が公にした「非常時局に対する声明書」(同上紙、一九三三・二・一五)は、状況に対する連盟の反応を見事に表明している。この声明書によると、国際情勢について連盟は、日本が孤立に陥らないように切望したが、その希望は報いられず、日本は「国際連盟を離脱するの己むを得ざるに至つた」とする。連盟は、創立以来国際連盟による世界の平和と秩序をつねに強調してきたが、いよいよ日本がこれを離脱するとなると、これをやむを得ないものとして反対しないのである。それでいて「国際間の親善理解を促進」することを唱えても、どれほどの意味があるのだろうか。それは、国際連盟離退に際して同じ趣旨をとなえた天皇の詔書(一九三三・三・二七)を奉じたからだ、と推定しても不自然ではない。声明書はさらに、三五―三六年にロ

ンドン条約が満期となつて、軍備拡張競争がおこり、日本が危機に遭遇するという風説に対して、事態を慎重に検討し、これに沈着に対処し、疑心暗鬼に陥ってはならない、という。たしかに、国家の危機的状况をおおることで、民衆を動員していこうとする支配勢力の政策を冷静に洞察することは、必要である。しかし、連盟の場合、二八年に「社会信条」を発表し、「軍備縮小、仲裁々判の確立、無戦世界の実現」を唱えている以上、さらに主張すべきことがここであつたはずである。

この総会には文部省当局者が出席し、国体の本義の自覚や国民精神作興の必要性を強調し、当時行われていた連盟の精神作興運動は高く評価し、キリスト教の日本化を促した。これに応えるかのように、声明書は国内情勢についてこのべる。「この際吾等は国民的運動の動向に深く留意し、日本精神の真意を把握し、その長所美点を擁護し、これを發揚するに努め、以て国運の隆昌国民の慶福今日ある所以の基を明らかにせねばならぬ。基督教の思想信仰は我が皇室の尊榮、国運の基礎を闡明するに最善の貢獻を為すものであると吾等は信ずる。」

国内には都市の民衆の頹廢と不安があり、農村の恐慌と農民の窮乏がある。國際的には中国への侵略とそれにとりなう國際的孤立化の状況がある。この事態をのりきるためには、日本国民を精神的に統合し、国家に対する犠牲的精神を養成することが必要になる。これを可能にするものは、日本の国体、つまり天皇制国家の尊嚴と榮誉への自覚である。なんとすれば、これを自覚した国民は、自負心と使命感をもってこれに奉仕する。そうすれば、彼らは退廢的な気分を一掃し、困窮に耐え、中国侵略という不義も、国威發揚のためである以上、正義の行爲となる。政府の国民精神作興とか国体明徴運動は、このような文脈で、あらわれたのである。前述の声明書はこのような政府の思想政策に見事にこたえるものであつた。従来より天皇制に弱い日本のキリスト教は、これをもち出して國民教化をはかった

政策に容易に同調し、キリスト教こそその精神教育の担い手であるという自己宣伝までそえて、民衆に臨んでいったのである。

ところで、政府が国民の精神的統合を図り、思想善導を宗教によって行なおうとしたとき、神社神道によることを考えていた。この神道は、敬神崇祖を基調として、天皇が神として統治する国家の神聖性と世界に冠たる優越性を唱え、神にひきいられた日本民族の誇りと忠誠を強調する。またこの神道は軍事的性格をもち、神州日本の不滅性や聖戦意識を高揚するものであった。そこで政府はこの神道を他宗教と区別して、特別の保護を与えてきたが、その制度的完成のために、神社法を制定する意図の下に、二九年一二月に内務省に神社制度調査会をつくり、その答申を期待した。

連盟は、二九年一〇月の第七回総会で、神社問題に関する調査委員をあげて検討させ、翌年五月にキリスト教諸団体の連名で「神社問題に関する進言」(同上紙、一九三〇・六・一五)を神社制度調査会に提出した。それによると、神社が宗教か否かが問題の中心であるから、これを明白に解決してほしい。神社が宗教でないならば、その崇敬の対象や祭祀の内容を非宗教化するべきであり、宗教であるならば、信教の自由の原則で、その宗教的行為を国民に強要すべきではない、というのである。この進言は、調査会に対して、近代的国家をたてまえとする天皇制国家が神道を国家宗教とするという矛盾をつきつける政治的発言とみることも可能である。しかし、さきのホーリネス教会の決議とちがって、この進言は神社の宗教性に関する自己の立場を明らかにせず、その決定を政府の關係機関にゆだねてしまった。その限りにおいて、連盟はすでに政府の神社非宗教の強弁を認める余地を残し、国家神道化の政策に反対する根拠を失っていた。

その後、ホーリネスのみならず、美濃ミッション、カトリック系の上智大学などで神社参拝拒否事件がおこった。特に上智大学の場合、この問題をめぐって参拝拒否をとるカトリック教会と文部省との間に交渉があり、文部省は三二年九月に次官名で、神社参拝は教育上の理由にもとづくもので、宗教上の理由で例外を設けることはできない。それは日本国民としての愛国心と忠誠をあらわすものだ、と回答してきた。カトリック教会は、政府の圧力に屈し、神社参拝を国民教育上の事柄として認めることを明らかにした。連盟総理事海老沢亮は「神社参拝問題に就て」(同上紙、一九三三・九・一五)でこの問題を取りあげた。彼はカトリックの場合「問題は既に解消したと見られている」とし、美濃ミッションのことについては政府当局の立場を丁寧に説明する。そしてさきの進言に対して、調査委員会の回答がないことをあげ、神社の宗教性の論議は未解決であるとする。さらに「此の際国民一般に疑惑を与えないためには、その所謂祭神を明示し、建国の歴史や国家公共のための偉勲等の事蹟を示して教育上徳義上の対象を瞭かにし、斯かる資格ある神社のリストを公表される事が緊急であると信ずる」。そして祭祀不明のものや国のために疑惑をもたれた人物を祀つてあるものまで敬意を表するのは、大きい矛盾だ、というのである。つまり、海老沢は、連盟の進言に対して回答がないといいながら、神社の宗教性に関する問題と神社参拝をきりはなすことで、後者を要求する文部省の見解に全く同意した考え方に立ち、国民教化のための神社参拝についていろいろ有効な方法をのべることで、文部省の政策を支持し、補完することばをのべているのである。これはさきの連盟の進言よりもさらに後退した見解といえよう。

その後の連盟の活動についてのべる必要は少なくなつた。これまでの敘述で、連盟がどうしてファシズムと結びつき、その支配体制のなかに埋没し、さらにはそれを補完する役割を担うようになったかは、明らかだからである。そ

の後の諸活動、たとえば第一四回総会（一九三六・一二）における社会信条の改訂、拡大常議員会によって、日中戦争に関する政府の声明を支持する「非常時局に関する宣言」（一九三七・七・二三）、政府の国民精神総動員運動への全面的協力、教界指導者の連署によって日中戦争の正当性を訴える「世界各国にある基督教指導者への開書」（一九三七・一二）、宗教団体法（一九三九・三）への対応、そして「皇紀二千六百年」奉祝全国基督教信徒大会（一九四〇・一〇・一七）その他がこれまでの連盟のいき方をより明確に、より具体的に示すものとなるだろう。

問題は何かといえば、まず連盟は日本の生存の危機といった事を感じとったところでは、その状況認識や価値判断が普遍性を欠き、いわば国家の維持、国家の利益を規範として、物事を考えるようになったところにある。しかもその場合、彼らは民衆の側に立ってその苦しみを負うのではなくて、知識人であるがゆえに支配勢力の側に自己を位置づけて、考え、行動していった。そこからは三〇年代では上よりのファシズムに加担する途しか歩めないのは当然である。もうひとつは国体、つまり天皇制に関して、連盟をふくめて日本のキリスト教界は、共感的にこれに信服する体質をもっていたところにある。したがってファシズムがこれを切札として民衆を動員していったとき、連盟もこの中にのめりこんでいった。彼らはたしかに神またキリストと天皇の関連を論理的に問いつめて来られたら、適当な理屈づけをしていった。事実三八年三月に大阪憲兵隊よりキリスト教関係者に対してこの種類の質問がなされたとき、彼らはそういう態度で臨んだ。問題はそこにあるのではなく、もっと心情的なマインドにかかわることである。ファシズムが民族とか、精神というときに、そこをついたのである。そしてキリスト教界の人たちは、そこからファシズムにからめ取られ、何もいえなくなるか、その宣伝者としてふるまうか、いずれにせよ、加担者の道を歩むことになったのである。

- (1) 『基督教年鑑』一九三四年、五四七―六六六ページ参照。そこには「職業別基督教者名簿」として、日本基督教連盟に關係する教会の会員で重立った信徒二八二八名の名前、職業、所属教会が記録されている。それによると、官公吏四一五、医療事業家一四七、教育家二九七、自営農一七八、中小商工業七二〇、会社員四六四、その他五五八(学生、主婦をふくむ)となっている。
- (2) 筆者はすでに一九三〇年代のキリスト教に關連して「一九三〇年代における日本基督教会の活動」(『日本プロテスタント教会の成立と展開』一九七六所収)、「一九三〇年代の教会」(『福音と世界』一九七四・五)、『小崎道雄の行動とその論理』(一九七二)を發表しているので、参照されたい。
- (3) 米田勇『中田重治伝』一九五九年、四二五―四二六、四五―四五五ページ
- (4) 喜田川信「いわゆるリバイバル時代とその前後―日本ナザレン史断面」(『神学思潮』一九六五・七)
- (5) アキスリング「神の國運動の海外への反響」(『基督教年鑑』一九三三年、一八一―二〇二ページ)
- (6) 海老沢亮『日本キリスト教百年史』一九五九年、二二二ページ
- (7) 日本のプロテスタント諸教派が一番大きく、賀川も所屬していた日本基督教会のある人たちは、賀川のとく神は聖書の神ではなく、賀川の瞑想した觀念の神であり、キリストの死も贖罪の死ではなく道徳的自己犠牲の死である。教会のなすべきことはこの運動にみる社会改良運動ではない、といひ(常葉隆興「神の國運動に対する疑義」(『福音新報』一九三一・六・四)、賀川のとくキリスト教は彼らが排斥して止まない社会的福音であり、神学のない神の國運動だとする(「スクラップ・ブック」同上紙、一九三二・八・一)。また神の國運動を海外の教会の援助を求めてにした連盟の運動といった批判もきかれた(逢阪元吉郎の寄書、同上紙、一九三二・一一・二四)。この運動とのずれを最も感じていたのは日基ではないかと思われるのであり、その事は表(二)にあげた受洗者数にも反映している。なお、ここにのべた彼らの批判は、かなりの射を射ている。しかし彼らの伝道にも問題がないわけではない。これについては注(2)の關係論文および本論文(2)を参照されたい。
- (8) 安達生恒「自力更生運動下の『家の光』」北河賢三「産業組合運動の展開と産青連」(いずれも季刊『現代史』一九七三・五所収)を参照。この号は「日本ファシズム その民衆動員の前提」と題する特集号で、日本ファシズムに對立するはずの日本の民衆がどのようにその加担者に動員されていったかを都市や農村のなかに見出し、そこから日本ファシズムの本質にせまろうとする諸論文を掲載しており、甚だ示唆に富む。
- (9) 連盟の諸活動には、このほか中国の基督教連盟との交流、教派合同運動がある。前者については、拙著『小崎道雄の行動とその論理』二四―二七ページ、後者は、日本基督教団の創立(一九四一・六)との関連があり、拙著『日本プロテスタント教会の成立と展開』二〇五―二一四ページを参照されたい。